

三代目、リチャード

日本・シンガポール・インドネシア国際共同制作  
*Sandaime Richard*

三 R  
目 III

日本・シンガポール・インドネシア国際共同制作

## 三代目、リチャード

*Sandaime Richard*

日本語・英語・インドネシア語上演 日本語・英語字幕付

Performed in Japanese, English and Indonesian with Japanese and English surtitles

2016(平成28)年

11.26(sat)—12.4(sun)

東京芸術劇場 シアターウエスト

Tokyo Metropolitan Theatre Theatre West

12.8(thu)

熊本県立劇場 演劇ホール

Kumamoto Prefectural Theater

12.11(sun)

吹田市文化会館 メイシアター中ホール

May Theater

12.14(wed)

高知県立美術館ホール

The Museum of Art, Kochi

12.17(sat)

福岡市立東市民センター なみきホール

Fukuoka City Higashi Ward Center Namiki Hall

本日は、野田秀樹作、オン・ケンセン演出「三代目、りちゃあど」にご来場いただき、まことにありがとうございます。

本公演の稽古はケンセンの強い希望で、今年3月バリ島の中部にあるブルナティ・アートセンターで始められました。この作品を精霊の住むというバリの深い森、未だ共同体が息づくバリの社会と結びつけたい、という思いがあったようです。稽古はバリのニュビと呼ばれる新年を挟んで行われました。ニュビの数日前より新年を迎えるにあたって様々な儀式があり、共同体が全員参加の芸能が行われます。繰り返されるガムランの単調なリズム、同じ動きをずうっと繰り返しているパロンダンスと呼ばれる獅子舞、そして単純な筋立てのチャロナラン劇はいつ果てるとなく続きますが、子供たちから年寄りまで村の人々は皆嬉しそうにおとなしく座り続けていました。ニュビの当日は、大声で口をきいてはいけないということで稽古は休み。緊急車両以外の交通も止まり空港も閉鎖します。夜は電気もつけず食事も作らず真っ暗な中で過ごすという神聖な夜なのです。

バリでの2週間の稽古の後、日本では東京そして金比羅歌舞伎の琴平で稽古を行いました。4月半ばには「ふじのくにニセかい演劇祭」の行われる静岡へと移動し劇場を使って稽古をした後、演劇祭のオープニング企画として4月29日に初日を開けました。9月にはケンセンが芸術監督を務めるシンガポール国際演劇祭参加作品としてヴィクトリア・シアターで上演し、11月の東京芸術劇場シアターウエストでの公演を迎えます。東京の後、熊本、吹田、高知、福岡での公演が行われます。

元々のシェイクスピアの作品は、シェイクスピアの生きた16世紀の英国社会を描いています。それに20世紀の野田秀樹が日本人の視点から、シェイクスピアの家族の話を持ち込み裁判劇に仕立てました。そして21世紀、その「三代目、りちゃあど」に長年アジアの伝統芸能のコラボレーションを模索しているケンセンが日本、インドネシア、シンガポールの役者を使って新たな命を吹き込みました。この作品からバリの神秘的な空間とのつながりを少しでも感じていただければと思います。

最後になりましたが、本公演の実現のためにご尽力いただきました全ての関係者の皆様に厚く御礼申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

東京芸術劇場 副館長 高萩宏

## —それぞれの冒険を夢見て

オン・ケンセン Ong Keng Sen

1997年、アセアン文化センター（国際交流基金のアジア部門）の製作による「リア」を演出した。当時の演出的構想が土台となり、アジアの伝統的なパフォーマンスの様式を並べ、多言語でセリフを発する私の特徴的な舞台のスタイルは生まれた。当時の私は、「ニューアジア」の舞台化というコンセプトの先駆者であり、それは数年にわたって大流行した。しかし私は流行りものに興味があったのではなく、模索していたのは表現のための共通言語だった。それは、私が何者で、どんな場所に住んでいるかといった関係性を表現するものだった。私という個人が、意識下、無意識下、そして潜在意識において、断絶しながらも精神的には歴史と繋がっているのだと。私は幼少からシンガポールで複数の言語を操り、伝統とグローバルな成長の狭間でうまく立ち振る舞うことを強いられた。「アジアの資本主義」を唱える国家の子だったのだ。私は資本主義というものは、アフリカやアラブ諸国、アジアでも根本的にそれほど変わらないと信じていたが、自分自身がアメリカ人やヨーロッパの人々とはどこか異なることも否めなかった。そこで、象徴的な作品を上演した。それが娘が父親を殺害する「リア」という、岸田理生氏の作品だ。

それから約20年の月日が流れ、私は「三代目、りちゃあど」で再びシェイクスピア作品に挑む。シェイクスピア没後400年の年に、野田秀樹氏が1990年代初めに発表したこの作品で、シェイクスピアを法廷で裁くことになる。私は、シェイクスピアから生まれた野田さんから生まれたのか。野田さんの描くシェイクスピアの世界観に、私の描く野田さんの世界観を描いているのか。それはまるでチャイニーズボックス（注：箱の中に箱があり、その箱を開けるとさらに箱がある）のようなゲームだ。今回は悲劇というよりむしろ、ある種の喜劇として作品と対峙している。野田さんの言葉遊びと電光石火のごとく繰り広げられる会話を、「文化単位(cultural-bytes)」が織りなす機知に富んだ丁々発止のやり取りに置き換え、芸術の形式や言語の相違、国際化、伝統を、素晴らしい俳優たちのパフォーマンスによって並べるといふ試みだ。皆さんは、私の舞台作品ではおなじみの、どこへ向かうのかわからない、ナンセンスの嵐が、やがて美しい夢へと収束されるのを目の当たりにすることだろう。

私はこの作品創りの旅の中で、多様性ということにこだわり続けてきた。そして今、日本という国が抱えるその多様性に興味を持っている。私が出会ったのは現代が抱えこんでいる複雑性だった。形式的な側面から伝統を提唱しつつも、ネオンに彩られたようなファンタジーが強烈な電子音楽と共に生き活きと脈打ち、ファッション大好き人間たちの国とでもいえる場所。ここで、私は中村孝太郎さんによって具現化される女形に魅せられ、狂言の著名な家系のもとに生まれながら日本でアメリカンスクールに通ったという茂山童司さんと出会い、久世星佳さんが活躍した現代的なミュージカルやショーを女性だけで演じる宝塚歌劇団にも魅せられている。私はこの「三代目、りちゃあど」という作品で、日本の伝統芸能（宝塚はもはや100年の歴史がある）を並べ、そこに英語、インドネシア語といった複数の言語を織り交ぜた。もちろん、私がこれまで歩んできたグローバルな現代社会を置き去りにしてはいないし、神秘的なバリの魅力や革新的なスタッフ達の支えもある。そして、今日の芸術家としての私は、現代の支配的な権力構造に問題を提起する意味合いも込めて、女性と男性という性別を面白く複雑に舞台化にしたいと思っている。つまり、劇作家が、彼の描く「女性の」キャラクターたちに包囲されてしまうのだ。

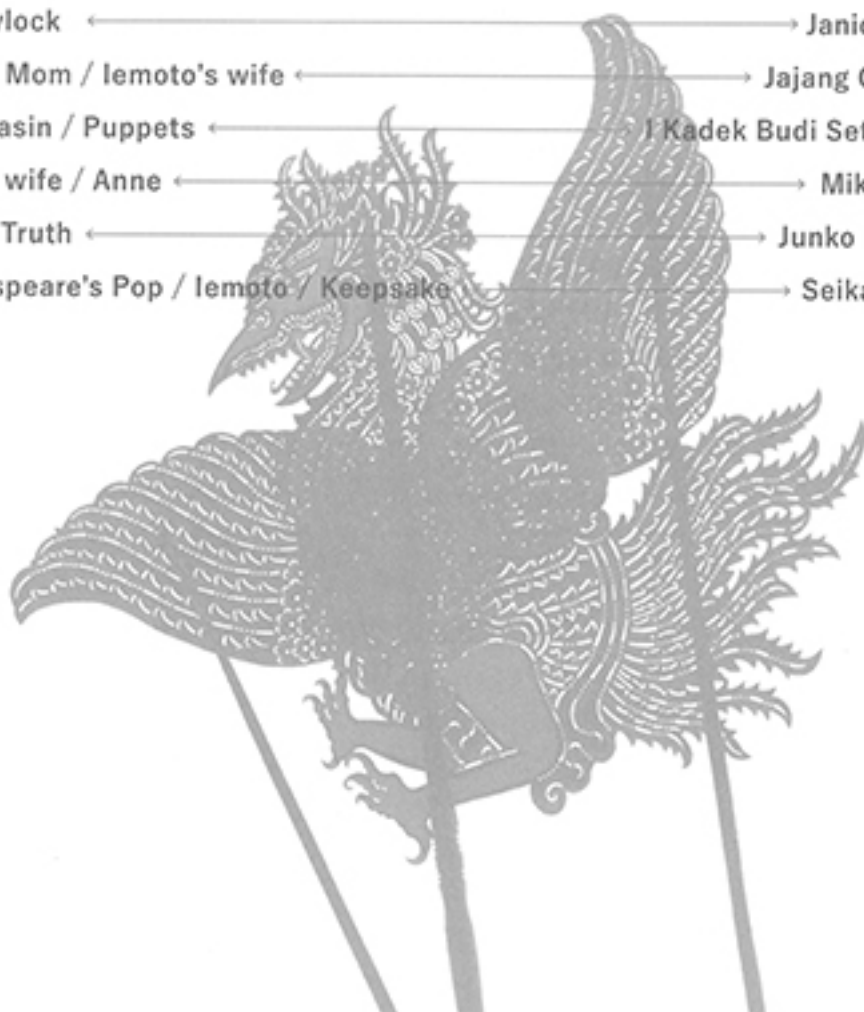
しばしば私はこの新作を豪華なコメディ作品と語り表してきた。あまり例を見ないが、リチャード三世役には女形をキャスティングした。この作品「三代目、りちゃあど」で、野田さんのコメディセンスに感化されたばかりでなく、アーティストとして、ひいては劇作家としてのあり方に究極的な感銘を覚えたからだ。アーティストとして歴史をいかに描くか。「リベンジ」を求め、富と名声を手にするため、過去の栄光を利用するのか。あるいは人として、次世代にインスピレーションを与えることを夢見て冒険を続けていくのか。

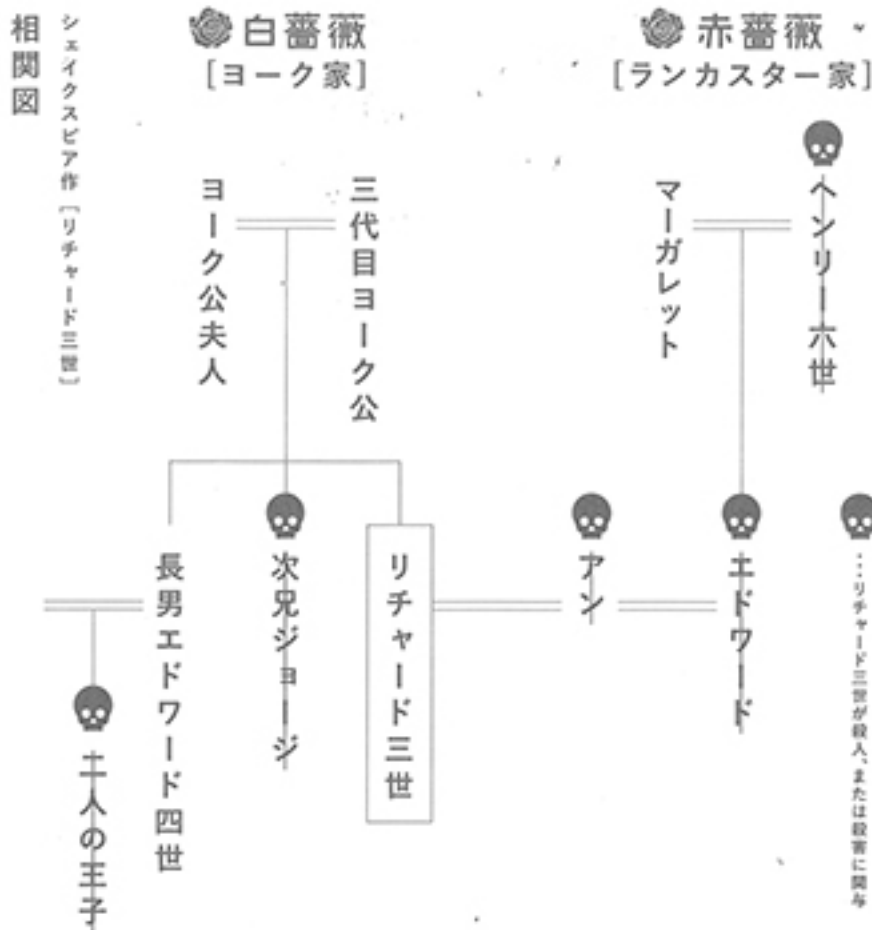
翻訳：門田美和

配役

リチャード三世 / リチャード	→	中村孝太郎
シェイクスピア / ジョージ	→	茂山童司
マーチャン / シャイロク	→	ジャニス・コー
ハハバイ(シェイクスピアの母) / 家元夫人	→	ヤヤン・C・ヌール
チャボーズ / 暗殺者 / 影絵人形遣い	→	イ・カデック・ブディ・スティアワン
ワルカツマー(シェイクスピアの妻) / アン	→	たきいみき
カイロブラクティック / シンリー	→	江本純子
裁判長 / チチデヨカ(シェイクスピアの父) / 家元 / ワスレガタミ	→	久世星佳

Richard III / Richard	→	Kazutaro Nakamura
Shakespeare / George	→	Doji Shigeyama
Maachan / Shylock	→	Janice Koh
Shakespeare's Mom / Iemoto's wife	→	Jajang C.Noer
Chabozu / Assassin / Puppets	→	I Kadek Budi Setiawan
Shakespeare's wife / Anne	→	Miki Takii
Chiropractor / Truth	→	Junko Emoto
Judge / Shakespeare's Pop / Iemoto / Keepsake	→	Seika Kuze





「馬をくれ、馬を！馬のかわりにわが王国をくれてやる！」 邪魔者を次々と始末し王冠を手に入れたリチャードは、家臣たちの反乱にあい、ボズワースの戦いでこう叫び息絶える。『リチャード三世』は十五世紀イギリスの薔薇戦争を題材にした歴史劇である。赤薔薇ランカスター家と白薔薇ヨーク家の覇権争いは、ヨーク家の勝利により平和を迎えていたが、王の末弟リチャードは王位を狙って画策する。彼は次兄ジョージを暗殺し、地位固めに前皇太子の未亡人アンを口説いて結婚。兄王が心労で病死すると、残る王位継承者である王子たちをロンドン塔に幽閉し暗殺する。「次期国王にはリチャードを！」という国民の声を演出した彼はしぶしぶ玉座につく。しかし喜びもつかの間、彼は家臣たちの裏切りを恐れるのだった。

『三代目、リチャード』のもう一人の主人公はシェイクスピア。リチャードが不自由な身体をもつという設定はシェイクスピアの創作だとか、彼にはリチャードという名の弟がいた、妻アンは悪妻だったなどの伝説が巧みに織り込まれる。さらに『ベニスの商人(マーチャント)』のシャイロクも登場。原作の金貸しシャイロクは三千ダカットの借金の抵当に相手の肉一ポンドを要求するが、裁判官の「血を一滴も流してはならぬ」という一言に阻まれ、全財産を没収され破滅する。

パロディ満載の作品だが、実は本家本元のシェイクスピアも既存のネタをもとに芝居を書く改作の名手だったことを知っておくと何倍もおもしろい。

道行千枝(福岡女学院大学人文学部言語芸術学科准教授)  
 出典:福岡市文化芸術振興財団発行「wa」vol.71より

## 『三代目、りちゃあど』と世界の創造への挑戦

—「もうそう竹が一本、天に向かって無限にのびていく」—

浜名恵美

オン・ケンセンは、シェイクスピア三部作等の尖鋭な演出で世界的に有名である。日本を代表する劇作家・演出家となった野田秀樹の夢の遊眠社時代の作品『三代目、りちゃあど』は、シェイクスピアという偶像を痛快無類に破壊した笑劇のように見えるが、実は、独自のやり方で、表現の自由と想像力の大切さを描いている。シンガポールは、多民族・多文化・多言語という多様性からなる国であり、グローバル市場経済のもとで躍進しているが、芸術家には表現の自由の点でいくらか苦勞があるらしい。ケンセンはこの作品の演出にやりがいを感じたことだろう。

ケンセンは他の作品の上演でも、男女の配役を逆にするなどして性に関する固定概念を転倒しようとしているが、この作品では、男性の主役には歌舞伎の女形、裁判長には宝塚の元男役の女優を配している。作品全体は、日本からは狂言、歌舞伎、宝塚、小劇場などからの俳優が出演し、シンガポールとインドネシアの俳優とگران(人形遣い)も加わり、日本語・英語・インドネシア語の台詞がとびかい、日英の字幕がつくという、彼らしい多文化、異種混交の演出となっている。

ケンセンはシンガポール国際芸術祭監督であり、劇団シアターワークスの芸術監督でもある。同劇団創設25周年記念の本の題名は、「アイデンティティからmondialisationへ」(2013年出版)である。これは、元来、同劇団の有名なフライング・サーカス・プロジェクト(アジアの多数の文化間の差異の認識をとおして、演劇・舞踊・音楽・視覚芸術・映画・儀式等の多領域にまたがる21世紀の表現を探求するプロジェクト、1996年開始)で2004年から明確にとりいれられた思想だが、今日では、同劇団と彼の演出全体に影響を与えるものとなっている。

フランスの思想家J-L・ナンシーは、画一性と不公正をもたらすglobalizationに抵抗して、“mondialisation”(あえて訳語をあてるならば「世界の創造」という概念を提唱し、多様性と公正さのある真正な世界を創造すべきだと主張している(『世界の創造 あるいは世界化』、仏語版2002年、邦訳2003年)。この思想に共鳴しているケンセンは、多様な文化や伝統をひとつに融合するのではなく、むしろ差異や不協和を保持したいと考えている。彼には、文化と文化が接する(または衝突する)縁をなめらかにつなぎあわせる気はない。この信念と方法こそが、リアルな多文化演劇を生みだすはずである。



ケンセンは、ひとつの様式や方法を採用せず、アメリカの大学におけるフランス現代思想(特に流動の哲学者ドゥルーズ)の近年の再燃を歓迎している。彼の仕事を最も強くつき動かす衝動は、一緒に仕事をする人々に影響(作用)されることであり、また人々に作用する方法を見つけることである。「三代目、りっちゃあど」を作るために一連の技法を使いながらも、彼は集成的方法を取り入れ、演者たちが創作の過程に関われるようにした。この方法は、多様性に適応することにより、国際共同制作の芸術的刷新と公正な世界の創造に資するものだろう。

ケンセンは、グローバル化の進行により世界各地で開催されるようになった国際芸術祭でよく見られる諸文化の無思慮な統合に対抗するような異種混交様式を使う。「三代目、りっちゃあど」では、アジアの多様な芸能様式が完璧に統合されているわけではない。大胆でにぎやかな舞台のアクション、テクニカラーの花々の投影、音楽、照明、その他の舞台装置や効果の洪水の中で、私たちの感覚はほとんど麻痺してしまう。とはいえ、この作品は、広い文脈の中でその真価を理解されるべきだろう。日本の伝統芸能様式である狂言、歌舞伎、(100年を超える歴史があるのでケンセンは現代の伝統芸能に分類している)宝塚から、過激な小劇団・毛皮族までが混ぜ合わせられた。シンガポールとインドネシアの演者を含めて、各演者は、互いに影響されながらも、それぞれの芸術的哲学、演技様式(型)、テンポ、スピード等の観点から、互いの接点でシームレスに溶け合っているのではなく、ぎざぎざしたエッジを保持している。この作品は、日本演劇の今日の現実と課題を示しているともいえる。

この作品は、特製の人形を用いて、ガムラン音楽演奏入りのバリ島の影絵芝居で始まり、終わる。結末は特に効果的である。バリの影絵芝居では、天国を象徴する半透明のスクリーンに宇宙樹が投影される。観客は、その崇高な美・強度・広がりによって圧倒される。これはケンセンが追加した見事な場面である。「世界の軸」としての「生命の樹」とも称される宇宙樹は、アジアの多数の神話や民話に広く認められるモチーフである。野田の原作は、「もうそう竹が一本、天に向かって無限にのびていく」幻想的で美しい光景で終わる。ケンセン演出版では、宇宙樹が舞台上の文化的な混乱も衝突も包み込み、私たちに演劇的想像力と「世界の創造」のトランスグローバルな価値を認識させることになるだろう。

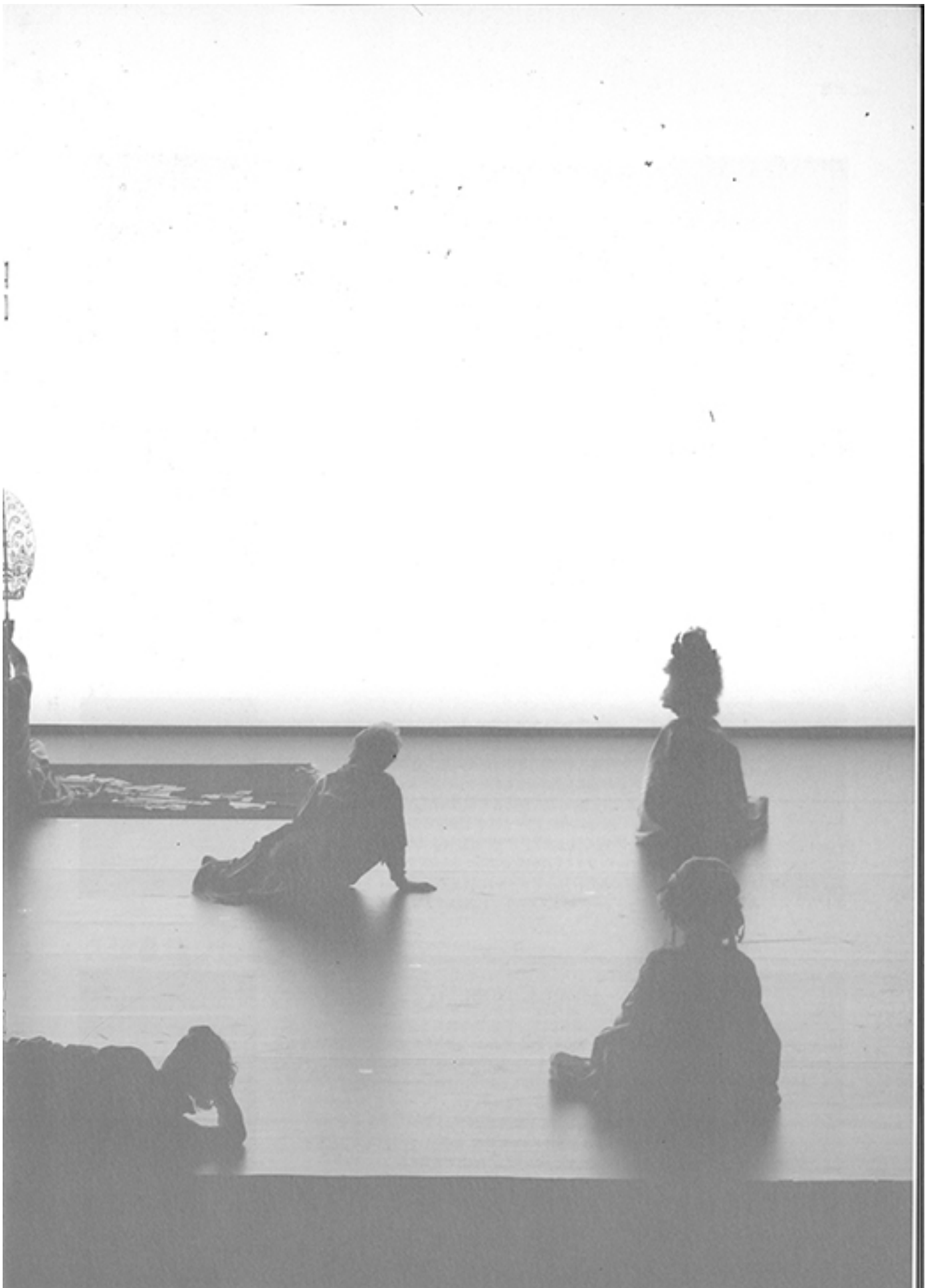
浜名恵美 Emi Hamana

東京都生まれ。東京女子大学教授、筑波大学名誉教授。専門はシェイクスピアを中心とする演劇、パフォーマンス研究。著書に「ジェンダーの驚き:シェイクスピアとジェンダー」(2004)、「文化と文化をつなぐ:シェイクスピアから現代アジア演劇まで」(2012)等。

# 「三代目、りかてあ」と世界のかみ

「三代目、りかてあ」と世界のかみ  
りかてあは、世界のかみ  
りかてあは、世界のかみ  
りかてあは、世界のかみ





## 中村 壱太郎 Kazutaro Nakamura

中村嘉治郎の長男。祖父は坂田藤十郎。母は吾妻徳穂。屋号は成駒家。1995年1月大阪・中座(五代目中村嘉治郎・三代目中村嘉治郎名披露興行)『嶺山姥』の一子公時で初代中村壱太郎を名のり初舞台。2007年史上最年少の16歳で大曲『鏡獅子』を踊る。2010年3月『曾根崎心中』のお初という大役に役柄と同じ19歳で挑む。現在、女方を中心に歌舞伎の舞台に精進しつつ、ラジオやテレビの番組にも活動の場を広げている。2014年9月日本舞踊吾妻流において、吾妻徳穂として七代目家元を襲名。2016年8月新海誠監督作品、映画『君の名は。』のヒロイン三葉の巫女舞の振付を担当する。平成23年度文化庁芸術祭賞新人賞。平成23年度咲くやこの花賞。2015年国立劇場優秀賞。平成27年度大阪文化祭賞奨励賞。



## 茂山 童司 Doji Shigeyama

大藏流狂言方。茂山あきらの長男。父および祖父二世茂山千之丞に師事。1986年『魔法使いの弟子』(NOHO(能方)劇団)で初舞台。1997年『千歳』、2004年『三番三』、2006年『釣狐』を披露。語学に堪能で近年はNHKテレビ語学番組『ブレキソ英語』にレギュラー出演していたほか、国内外でバイリンガル狂言公演や他ジャンルのアーティストとのコラボレーションを行っている。2013年夏に自ら作・演出を手掛けるコント公演『ヒャクマンペン』、2014年春に100年後の古典を目指す新作狂言の会「新作“純”狂言業マリコウジ」の両プロジェクトを始動。2015年東京芸術劇場、金沢歌劇座で上演のオペレッタ『メリーウィドウ』の脚本・演出を手掛けるなど役者としてだけでなく演出家としても精力的に活動中。



## ジャニス・コー Janice Koh

シンガポールの舞台とテレビで活躍し、任命議員も務めたことがある。シンガポール国立大学で演劇学を学んだ後、ロンドンのゴールドスミス・カレッジで修士号を取得。2003年デヴィッド・オーバーン『ブルーフ/証明』の演技によりライフ!シアター・アワードの最優秀女優賞を受賞。2010年にはチャンネル5の法廷ドラマ『ザ・ビューブル』の演技でアジア・テレビジョン・アワードにノミネートされた。海外での出演も多く、劇団ワイルド・ライス『アナザー・カントリー』クアラルンプール公演(2015年)、ブリュッセル・クンステン・フェスティバル・デザールにて『リア王プロジェクト』(2008年)、エジンバラ国際演劇祭にもシアター・ワークス『ディアスポラ』(2009年)等がある。



## ヤヤン・C・ヌール Jajang C. Noer

現在のインドネシアの演劇界と映画界において、演出家・監督・俳優として最も多くの作品に関わっているインドネシア人の女優の一人。『ビビール・メル』で1992年インドネシア映画祭助演女優賞を受賞した後も、多くの映画で異彩を放つ。他に2013年東京国際映画祭で上映された『目隠し』、2014年にインドネシア映画祭最優秀作品賞を受賞した『カハヤ・ダリ・ティムール:ベタ・マルク』などがある。舞台での活躍は1972年にシアター・ケトジルと共同制作に遡る。テレビ映画では『ブカン・ベレムプアン・ピアサ』でインドネシア・テレビドラマ・フェスティバル最優秀連続ドラマ賞受賞。女優としてだけでなく演出家としても知られる。50本近くの映画やテレビ映画に出演し、インドネシア内外で受賞多数。



## イ・カデック・ブディ・ステイアワン | Kadek Budi Setiawan

影絵マスターの家系に生まれる。影絵制作、影絵使い、音楽家、舞踊家としての才能は、共に著名な影絵師であった両親から受け継いだ。ウダヤナ大学で英文学を学んだ後、国立芸術学院 (ISI) デンバサール校影絵学科を主席で卒業。その才能を生かし、オーストラリア人との共同制作によるパリの伝統的な物語『シータ姫の誘拐』を脚色した影絵芝居(ピーター・ウィルソン演出)、オランダ・アムステルダムミュージック・ヘボウ・アアン・ヘット・アイでのジャズ音楽と影絵のコラボレーション、2013年パリ・アート・フェスティバルでの影絵芝居『ヴェローナの二紳士』(ジョン・バンド演出)への出演など、日本、イタリア、ドイツ、オーストリア、オランダ等の海外でも活躍している。



## たきいみき Miki Takii

文豪好きが高じて女優を志し、2001年劇団「ク・ナウカ」入団、2006年よりSPAC在籍。宮城聰演出『ふたりの女 平成版 ふたりの面妖があなたに絡む』(作: 唐十郎)、『夜叉ヶ池』、『真夏の夜の夢』(潤色: 野田秀樹)等にメインキャストとして出演。クロード・レジ演出『室内』で海外ツアーにも参加するほか、フレデリック・フィスバック、オマル・ボラス、ユディ・タジュディンら海外からの招聘演出家の作品でも印象的な役を演じている。



## 江本純子 Junko Emoto

立教大学入学と同時に演劇を始め、21歳で劇団「毛皮族」を旗揚げ。2000年代、毛皮族は祝祭的な演劇作品の数々を上演し演劇界で一躍した存在となった。2009年、10年に発表した『セクシードライバー』『小さな恋のエロジー』は岸田國士戯曲賞の最終候補となる。主な演出舞台作品に『ライチ☆光クラブ』『幕末太陽傳』等、主な舞台出演作にポツドル『愛の渦』、『農業少女』(野田秀樹作/松尾スズキ演出)、シアター・コクーン+大人計画『ふくすけ』等。2014年に劇団活動を休止し、現在は劇場ではない場所での演劇制作を創作活動の中心とする。2016年は目黒区大橋のガレージで『黒い三人のこども』、小豆島大にて野外演劇『とうちゃんとしょうちゃんの猫文字』を発表。初監督長編映画作品『過激派オペラ』が16年10月に公開。



## 久世星佳 Seika Kuze

1983年宝塚歌劇団に入団し、96年より月組トップスターに就任。97年の退団後は、舞台を中心に映画やTVドラマなど多方面で活躍。『OUT』で第8回読売演劇大賞優秀女優賞受賞。ドラマ『第2楽章』、『あさきゆめみし〜八百屋お七異聞』、『科捜研の女』、『神の舌を持つ男』などに出演。近年の主な出演舞台に『祈りと怪物〜ウィルヴィルの三姉妹〜』(演出: クラリーノ・サンドロヴィッチ)、『9 days Queen〜九日間の女王〜』(演出: 白井晃)、『プレス・オブ・ライフ〜女の肖像〜』(演出: 蓮葉電太)がある。



## 作：野田秀樹 Hideki Noda

劇作家、演出家、役者。1955年、長崎県出身。大学在学中に劇団夢の遊戯社結成。一大ブームを巻き起こし、92年に解散。ロンドン留学を経て93年、NODA・MAPを設立。「キル」「バンドラの鏡」「オイル」「THE BEE」「THE DIVER」「ザ・キャラクター」「MIWA」「逆鱗」などの話題作を発表。国内のみならず海外でも精力的な活動を展開。09年、東京芸術劇場の芸術監督に就任。14年には「半神」で「赤鬼」以来9年ぶりとなる韓国との国際共同制作に取り組んだほか、5月～6月には「THE BEE」English Versionの欧州ツアー、15年3月に「エッグ」がバリ国立シャイヨー劇場に正式招待された。

## 演出：オン・ケンセン Ong Keng Sen

シンガポール国際芸術祭のディレクター。舞台演出家として現代芸術におけるアジアの美の発展とトランス・グローバリゼーションに積極的に貢献。ニューヨーク大学大学院のティッシュ・スクール・オブ・ジ・アーツのコースを終了した他、法律の学位も持つ。シェイクスピア三部作は、リンカーン・センター、エジンバラ国際フェスティバル、パリ市立劇場、SPAC-静岡舞台劇術センター、シアター・コクーン等、世界各地で上演された。劇団シアターワークスの芸術監督として世界的に有名なフライング・サーカス・プロジェクト（現在休止中）やアーツ・ネットワーク・アジアを立ち上げ、新進のアーティストの指導も積極的に行っている。2010年にはアジアのコンテンポラリー・パフォーマンスの功績に対し福岡の名誉ある福岡アジア文化賞を授与された。

## 美術：加藤ちか Chika Kato

多摩美術大学絵画科日本画専攻。日本画科加山又造氏、舞台美術家朝倉摂氏を師事。在学中より、劇団第三エロチカ（川村毅主宰）8年在団後フリーの舞台美術家になる。様々な作風、作品、演出家と500作以上の作品製作をする。1999年読売演劇大賞最優秀スタッフ賞受賞。主な作品に、NODA・MAP「走れメルス」、歌舞伎座製作「新巻、舌切り雀」、劇団第三エロチカワールドツアー「マクベスという名の男」等。

## 照明：スコット・ジェリンスキー Scott Zielinski

ニューヨークを拠点に、演劇、ダンス、オペラの照明デザインを手がける。ブロードウェイをはじめリンカーン・センター等アメリカ国内の数多くの劇場のほか、アデレード、アムステルダム、アヴィニヨン、ベルリン、エジンバラ等世界各地で照明デザインを手がける。ダンスでは、アメリカン・バレエ・シアター、アメリカン・ダンス・フェスティバル、シュトゥットガルト・バレエ等、オペラではブレゲンツ音楽祭、ニューヨーク・シティ・オペラ、ロイヤル・オペラ・ハウス等。ウェブサイトは [scottzielinski.com](http://scottzielinski.com)

## 衣裳：矢内原 充志 Mitsushi Yanaihara

1997年～2011年国際的に活躍するパフォーマンスアート・グループ「ニプロール」のアートディレクター・衣裳担当として活動。平行して2002年～09年「Niproil about Street」名義で東京コレクションを発表。東北での震災を受けてこれまでの表現活動を見直し、2011年からリアルローズのメンズブランド「Mitsushi Yanaihara」を始動。また衣裳家として海外を中心に活動しながら、国内では様々なプロジェクトのアートディレクションを手がけている。

## 映像：高橋啓祐 Keisuke Takahashi

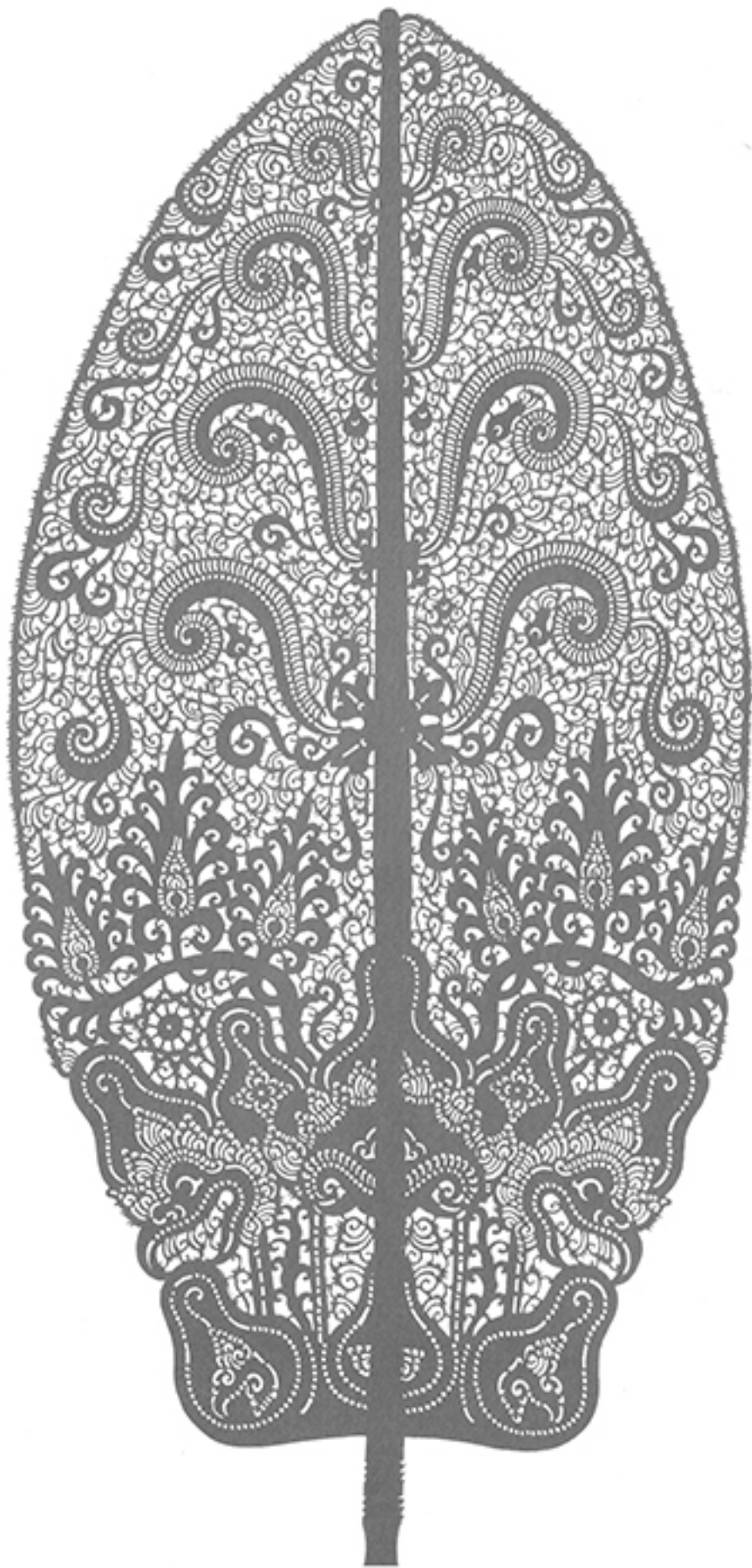
映像作家。美術館、ギャラリー、劇場、パブリックスペースなど多様な空間で作品を発表。映像インスタレーションとともにパフォーマンスも展開し、身体と映像の関係性を追求している。イタリアなど海外での個展を始め、瀬戸内国際芸術祭(16年)など国際展にも作品を出品。またダンスカンパニー「ニプロール」では設立時より映像ディレクターを務め、数多くのダンスや演劇などの舞台映像も制作。05年「第9回文化庁メディア芸術祭」審査委員会推薦優秀作品受賞等。

## 音楽：山中透 Toru Yamanaka

作曲家、プロデューサー、DJ。京都を中心に実験音楽系のフィールドで活動を始め「dumb type」の立ち上げに参加。音楽と音響を担当。伝説的なドラッグクイーン・イベント「Diamonds Are Forever」のDJ、主催者で、様々な分野の人々とコラボレーションを行う。近年はオン・ケンセンのカンパニー、シアターワークスの音楽監督、Monochrome Circus、じゅんじゅん Science、MuDA、頭と口らの音楽を担当。自身の作品に2016年CDMusic for Performances Volume 2・Remmings等がある。

## 演出補：リサ・ポーター Lisa Porter

1997年よりオン・ケンセンとのコラボレーションを開始。主な作品にアジア、ヨーロッパ、オーストラリア公演、国際共同制作「リア」「ゴヤを見つめて」。その他、ロバート・J・ウィルソン、ローリー・アンダーソン、ミハイル・バリシニコフのホワイト・オーク・ダンス・プロジェクト、ヨーヨー・マ&シルクロード・アンサンブル、ブロードウェイ、オフブロードウェイ、アメリカ各地の大劇場での舞台等に関わる。カリフォルニア大学サンディエゴ校にて教鞭をとる。





「三代目、リチャード」

作 野田秀樹

ウィリアム・シェイクスピア「リチャード三世」  
(小田島雄志訳)より

演出 オン・ケンセン

美術 加藤ちか  
照明 スコット・ジェリンスキー  
衣裳 矢内原充志  
映像 高橋啓祐  
音楽 山中透  
ヘアメイク 中村兼也  
音響 細越泰良  
演出補 リサ・ポーター

ドラマタージュ 角田美知代  
プロダクションマネージャー 大平久美  
舞台監督 ザック・ケネディ/山貫理恵  
舞台監督助手 川上大二郎/酒井聡澄  
照明助手 新島啓介(東京芸術劇場)  
衣裳助手 垣根千晶  
映像助手 革崎文  
大道具 池森秀明  
通訳 門田美和

パペットデザイン・製作 イ・カデック・ブディ・スティアワン  
ジャンティ・プテュバニンシ

大道具製作 株式会社村上舞台機構  
株式会社東広

CADオペレーション QR8C  
照明プログラム・操作 吉枝康幸  
藤田隆広  
柴田晴香(東京芸術劇場)  
阿部桃子(地方公演)

映像操作(地方公演) 酒井小陽/古田島邦明

音響操作 山畑真/大橋正幸  
ワードローブ 阿部朱美  
音楽協力 石川智久  
衣裳協力 藤井製帽株式会社  
WATANABE PILE

技術協力 株式会社K Productions、株式会社マグナックス、  
イルミカ東京、小田桐秀一

音響アドバイザー(東京) 石丸耕一(東京芸術劇場)

台本翻訳協力(英語) ロバート・ティアニー  
角田美知代

台本翻訳(インドネシア語) 安齋恭子

字幕作成・操作 斎藤努/門田美和

権古代役 泉陽二

方言指導 前田こうしん

宣伝美術 矢内原充志+河ノ剛史

Sandaime Richard

Written by Hideki Noda

Inspired by Yushi Odashima's translation of  
Shakespeare's Richard III

directed by Ong Keng Sen

Set design Chika Kato  
Lighting design Scott Zielinski  
Costume design Mitsushi Yanaihara  
Video Keisuke Takahashi  
Music Toru Yamanaka  
Hair make Tomoya Nakamura  
Sound Yasuyoshi Hosogoshi  
Associate Director Lisa Porter

Dramaturg Michiyo Sumida  
Production manager Kumi Odaira  
Stage Manager Zach Kennedy / Rio Yamanuki  
Assistant stage manager Daijro Kawakami / Toshimizu Sakai  
Assistant lighting designer Keisuke Nijima(TMT)  
Assistant costume designer Chiaki Kakino  
Assistant video designer Moyou Kawasaki  
Carpenter Hideaki Ikemori  
Interpreter Miwa Monden

Puppet design and production IKadek Budi Setiawan  
Herdjanti Puspaningsih

Set production Murakami Butai Kiko  
Toko

CAD operation QR8C  
Lighting operator Yasuyuki Yoshieda  
Takahiro Fujita  
Haruka Shibata(TMT)  
Momoko Abe

Video operator Sayo Sakai / Kuniaki Kotajima

Sound operator Masato Yamahata / Masayuki Ohashi

Wardrobe Shumi Abe

Music cooperation Tomohisa Ishikawa

Costume cooperation Fujii Hat Co.,LTD

Technical cooperation Watanabe Pile

K Productions Ltd. / Magnux Inc. /

Illumica Tokyo Co.,LTD.

Sound Advisor Kouichi Ishimaru(TMT)

English script contributed by Robert Tierney

Michiyo Sumida

Indonesian script translation Kyoko Anzai

Surtitles Tsutomu Saito / Miwa Monden

Stand in Yoji Izumi

Dialect Coach Koushin Maeda

Promotional design Mitsushi Yanaihara

Takeshi Kawano

記録・宣伝映像 高橋啓祐  
舞台写真 石川純

法務アドバイザー 福井健策  
岡本健太郎(骨董通り法律事務所)

制作アシスタント 斎藤努  
プロデューサー 東京芸術劇場  
高萩宏/宮村恵子/阿部見久/  
吉田直美/黒田忍  
シンガポール国際芸術祭  
テイ・トン/フレッド・フルムバーグ

Video recording and edit Keisuke Takahashi  
Stage photos Jun Ishikawa

Legal advisors Kensaku Fukui / Kentaro Okamoto  
(Kotto Dori Law Office)

Assistant of Administrator Tsutomu Saito  
Producer Tokyo Metropolitan Theatre  
Hiroshi Takahagi / Keiko Miyamura /  
Akihisa Abe / Naomi Yoshida / Shinobu Kuroda  
Singapore International Festival of Arts  
Tay Tong / Fred Frumberg

【東京公演】東京芸術祭 2016 / 芸術オータムセレクション  
主催：東京芸術劇場・アーツカウンシル東京  
(公益財団法人東京都歴史文化財団)

[Tokyo] Produced by  
Tokyo Metropolitan Theatre / Arts Council Tokyo  
(Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)



芸術オータムセレクション「三代目、うちやあど」は東京芸術祭 2016の一作として開催されます。  
東京芸術祭 東京の多彩で奥深い芸術文化を通して世界とつながることを目指した、都市芸術総合芸術祭を創設します。  
2016年秋は舞台芸術フェスティバルを豊島区池袋エリアで開催、新たな芸術観をはくくり交流と参加の場が生まれます。



【熊本公演】主催：公益財団法人熊本県立劇場  
後援：熊本日日新聞、NHK熊本放送局、TKUテレビ熊本、  
特定非営利活動法人 熊本インドネシア友好協会

[Kumamoto] Produced by Kumamoto Prefectural Theatre

【吹田公演】主催：公益財団法人吹田市文化芸術振興事業団

[Suita] Produced by Kumamoto Prefectural Theatre

【高知公演】主催：高知県立美術館  
後援：NHK高知放送局、高知新聞社、RKC高知放送、  
KUTVテレビ高知、エフエム高知、KSSさんさんテレビ、  
KCB高知ケーブルテレビ、高知シティFM放送

[Kochi] Produced by The Museum of Art, Kochi

【福岡公演】主催：公益財団法人福岡市文化芸術振興財団、福岡市  
後援：福岡市教育委員会  
平成28年度福岡市民芸術祭参加

[Fukuoka] Produced by Fukuoka City Foundation  
for Arts and Cultural Promotion, Fukuoka City

共催：シンガポール国際芸術祭、SPAC-静岡県舞台芸術センター  
企画制作：東京芸術劇場、シンガポール国際芸術祭、  
SPAC-静岡県舞台芸術センター、熊本県立劇場、  
吹田市文化芸術振興事業団、高知県立美術館、  
福岡市文化芸術振興財団  
後援：在日邦インドネシア共和国大使館、在京シンガポール大使館  
協力：NOOA-MAP、松竹株式会社、  
バリ・プナティ・アート・センター、西国学院大学  
助成：一般社団法人全国モーターボート競走実行者協議会、  
一般財団法人地域創造、  
平成28年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業(熊本、吹田、高知、福岡公演)  
日・シンガポール外交関係樹立50周年記念事業

Co-produced by Singapore International Festival of Arts  
SPAC-Shizuoka Performing Arts Center  
In association with Tokyo Metropolitan Theatre / Singapore International Festival  
of Arts / SPAC / Kumamoto Prefectural Theatre / May Theatre / The Museum of  
Art, Kochi / Fukuoka City Foundation for Arts and Cultural Promotion  
Supported by Indonesian Embassy Singaporean Embassy  
Special thanks to Noda Map / Shochiku Co., Ltd. /  
Bali Purnati Center for the Arts / Shikoku Gakuin University  
Supported by Japan Foundation for Regional Art-Activities  
Agency for Cultural Affairs Government of Japan, the Agency for Cultural Affairs,  
Government of Japan in the fiscal 2016  
S.150-Anniversary





発行 東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
デザイン 矢内原克志+河ノ剛史  
印刷 協進印刷  
発行日 2016(平成28)年11月26日  
禁無断転載

